

ASSB誌第6巻第1号 別冊

ソシュール講義（抄）

※バイイとセシュエによって編集されたソシュールの『一般言語学講義』の原資料のうち、ソシュールの3回にわたる講義のノートの抄訳をまとめた。出典は丸山圭三郎『ソシュールを読む』（岩波書店）。第2回講義の序説には前田英樹訳『ソシュール講義録注解』（法大出版会）があるので省略した。また、資料の14、15頁は『講義』の言語価値について述べた部分（第2部第4章）に対応する原資料となっている。なお、ソシュールの3回の講義についての解説は『ソシュール小事典』（大修館書店）にある。

一般言語学序説(SM1-7、R)リードランジェのノート1、一四六ページ)
 序論、言語学上の誤謬の分析、音声学原理
 言語学(SM8、R)のノート1、四七一五〇ページ)

第一部 進化現象

- \$1 音声学進化(SM19-16、R)のノート1、五〇ページ—Rのノート2、四ページ)
- \$2 類推的变化(SM17-2、R)のノート2、五ページ—Rのノート3、一七七ページ)
- \$3 印欧語族の内的および外的歴史の概観(SM43-4、R)のノート3、一八一四五—一八二一ページ)
- \$4 再構的方法とその価値(SM15-6、R)のノート3、四六一七二—二一七三ページ)

「言語学の問題をより深く掘り下げるためには二つの途がある。理論的方法(綜合)と実際的方法(分析)である。我々は後者の途をとり、まず言語学上の誤謬の分析から始めることにする。これは、我々があつかう科学を、その否定面において考察することであり、言語学上の誤謬とは、ペーコンがコトバに関する洞窟(誤解)と呼んだものばかりか、言語学のもつイドラ(幻像)をも指している。」

「我々はごく当然のこととして書かれた記号の方に語られた記号よりも優越性を与えてしまふ。そして書かれた記号が語られた記号の規範のように思われているのである。理由は二つある。一つは、多くの人々に見られる心理的なものであって、目に訴えるもののほうが、耳で伝えられたものよりもなにか確かなものだという考へ方で、これは視覚に訴えるもののほうが音声学より安定していることから来ている。もう一つの原因はより特殊なもので、言語が一つの規則に縛られており、この規則は書かれた文字を基盤にして作られた学校文法であるということから生ずる偏見である。」

「しかし音の等質性というものは、その持続が八分音符のものとか十六分音符のものであるか、などということには依存していない。大切なのは、その音が持続するあいだ中、聴覚印象が同一であるかどうかを知ることである。」

「音素を分類するにあたっては、それらが何からできてくるかを知ることより、それらが互いに何において異なっているかを知ることが問題である。したがって、分類に際しては、否定的な要因の方が肯定的な要因より重要となる。」

「言語学なる営為を行うとき、そのすべての規則において、音声学者とか生理学者である必要は全くない。(……)生理学的音声学は言語学に属していない。」

「ラングというものは信号体系である。ラングを構成しているものは、これらの信号間に精神が打ち立てるところの関係であり、信号の素材そのものは非関与的なものと見做すことができよう。我々が、信号のために一つの音的な素材を、そして唯一の素材を用いざるを得ないことは確かだが、かりに音が変化しても関係が変らない限り、言語学はそのような音変化に係わらない。(例えば海上信号。あの海上信号のバレットの色が薄くなったところで、信号体系に何一つ変化が起きたことにはならないだろう。)」

(1)

ら、ソシュールは一九〇九年一月十九日のリードランジェとの対談で「最良の方法は、偉い言語学者が静態的な現象について語るとき用いる表現を取りあげ、そこにとどのよ
 うな誤謬と錯覚があるかを観察することだ」と言っており、

「主題の複雑さがどんなものであるかを理解するには、コトバに関する次の三つの考え方を比較するだけで十分である。これらの考え方は当然なものとして提起されているが、一つとして完全なものはない。」

(1) 言語を、根も環境もたない一つの有機体と考えたり、自らの生をもち、おのずから生長する一つの種の如くみなす考え方。これは抽象としてとり出された(言語)であって、これをもとに具体的存在が作られるとする考えである。ところが実は、言語なるものは具体的人間と集団の中にしか存在していない。これを認めたところから、次の二つの別な考え方が生れる。

(2) 人びとは特に個人において言語を考察する。そして、たとえば、食べる」という機能と同じような自然的機能を、言語の中にも見かねないのである。その理由としてあげるのは、我々が、コトバのためにあつらえられた音声器官と、自然な叫び声を有しているということだ。だが、社会という形を取ってはじめて作動可能なこの自然的機能などというものは、いったい何であろうか?

(3) そこで、三番目の考え方はコトバを社会的、集団的側面から捉えるものである。これはむしろ、個人における言語 language としてのコトバ、langage というよりは、ラングであって、社会制度のことである。この考え方は前の二つの考え方よりは真理に近いが、ラングという制度に比較できるような他の社会制度を一つでも挙げられるだろうか。それはどラングなるものは、その機能が独自のものであったのと同じように、制度としても独自のものなのである。」

前の一九九四年に書かれていたことです。次の手稿10、断章番号三二九七番を講義の文と比較してみてください。

「何人かの高名な学者が言った。『コトバは全く人間外の存在で、即自的に組織され、人間の表面にひろがった寄生植物の如きものである』と。他の人々は、『コトバは人間のものであるが、自然の機能に従っている』と言った。ホイットニー曰く、『コトバは人間の制度である』。この考え方は、言語学の軸を変えた。

それに続くものも言うだろう。『それは人間の制度であるが、その特性はエクリチュールを別にしてあまりにも他の諸制度と異なるので、このアナロジーを信用すると、コトバの本質を見誤ってしまう恐れがある。事実、他の諸制度は、程度の差こそあれすべて自然の關係に基盤を置いており、究極の原理として事物の合目的性の上に依拠している。たとえば、一国の法律とか政治制度にしても、また人の着る衣服の流行にしても、我々の衣服を決めるあの移り気な流行すが、一瞬たりとも人間の身体の大きさという所与からのがれることはできない。

しかし、コトバとエクリチュールは、事物の自然な關係にその基盤を置いていないのである』と。」

(2)

「音声変化というものは我々が意識していない言語現象の一つで、当然、直接与えられてはいないものである。すべての語において、個別の要素が音声変化を蒙ったからといって、個別の要素がある法則下におかれて変化するなどというものはあり得ない。したがって、音声学法則などという語を使用することは誤りである。」

「私たちが文法的効果を問題にするときには少なくとも二つの形態、二つの辞項というものを考えざるをえなかった。文法的事実を語る時にもやはり事情は変らない。(……)したがって、(1)つねにそこには一対の二項がある(たとえば、faber「職人」とfabrica「仕事場」)。(2)音声の変化といったものは、いまのペアになった二つの項の差異をはっきりさせるだけであって、ペアそのものを生み出すことはできない。ふつうはその反対のように思いたくなるものだが。」

この箇所をわかり易く説明する文が講義IIIにあるので、引用しておきましょう。「厳密に言うと、シーニュが在るのではなくて、シーニュ間の差異があるだけである。チェコ語の例をひこう。妻という意味のženaの複数属格ženyである。その言語の中においてžena, ženの存在価値は、以前に存在していたženaとその複数属格ženyと全く同様である。どちらがより優れている対立とも言えない。(……)ženの価値は、それがženaと異なることから生じ、ženの価値もそれがženaと異なることから生ずる。」

「我々は類推的变化と言うべきであろうか、それとも類推的創造と言うべきであろうか。類推現象は三種の登場人物から成るドラマである。すなわち、(1)正統、世襲の伝承型、(2)競合型、(3)競合型を生み出した諸形態である集合型。一般に、honos「名誉」が類推によってhonorに変化したことは、honosという正統型にとって代わるhonorが出現したことだと思われている。(……)実はそうではなく、これは一つの創造であり、パラプラスム(paraplasme)と呼ばれるものであって、一つの形態のかたわらにその競合型を生じせしめる現象なのだ。ここですぐに重要な注意をおかねばならない。それは、類推的变化においては、後にとって代わられた形態(honos)が、必ずしも消滅していないことであり、それに対して音声変化の場合には、先行する形態(honos)を消滅させることによってはじめて新しい形態(honor)が生れる事実である。」

「人が語るためにはラングの宝庫がつねに必要であるというのも事実であるが、それとは逆に、ラングに入るものはすべてまずパロールにおいて何回も試みられ、その結果、持続可能な刻印を生み出すまでくり返されたものである。ラングとはパロールによって喚起されたものの容認にすぎない。」

今ここで問題となったラングとパロールのこの対立は、それがランガージュの研究に投げかける光の故に非常に重要である。この対立を特にはっきりと感じさせ観察可能にさせる一つの手段は、ラングとパロールを個人の中で対立させてみることである。(……)そうすれば、このラング、パロールという二つの領域が殆んど手にとるようにはっきりと区別されるのがわかるであろう。ディスクールに要請によって口にされるすべてのもの、そして個別の操作によって、表現されるものはすべてパロールである。個人の頭脳に含まれるすべて、耳に入り自らも実践した形態とその意味の寄託、これがラングである。

この二つの領域のうち、パロールの領域はより社会的であり、もう一方はより完

全に個人的なものである。ラングは個人の貯蔵庫である。ラングに入るもの、すなわち頭の中に入るものはすべて個人的なものである。」

「コトバの要素が存在するということは、それが語る主体の付与する価値——明確な意味——とともに前後いずれかの方向に境界画定されることである。」

「ラングの分類と、文法学者の分類がどの程度まで一致するかを知ることは、またどの程度まで文法学者の言う単位が本当に語る主体の意識の中に存在するかどうかを見ること、これが問題のすべてである。」

「文法学者は、語を考察するにあたって、諸要素を物質的に分類して考える視点とは別の、もう一つの視点に立つことだってできるはずだ。(この解剖学が、いまや言語学において主流となっていることはたしかだけれども)」

「言語が文法学者の図式に従うことはあり得ない。それは別の視点から見られるものであって、文法学者が考える諸要素と同じ要素が言語に与えられているのではない。言語は文法学者からみれば誤りと見做されているようなことを行う。しかしながら、それは実のところ誤りではない。何となれば、言語によって直ちに認められたものだけが、言語内に容認されたものとして存在するのであるから。」

したがって、語る主体自身によってなされる主観的分析(これだけが重要なものなのだ!)と文法学者が行う客観的分析のあいだには、一つとして対応するものはない。」

講義II (SMII 50-94)

序説

I 言語学とその対象(SMII 50-61. Rのノート一四三ページ)

- \$1 外部から定義されたラングの性質
- \$2 内部から見たラングの性質

II 言語学的事象の内的分割(SMII 62-83. Rのノート四三一一九ページ)

- \$1 内的側面と外的側面
- \$2 言語価値
- \$3 通時的次元と共時的次元
- \$4 二つの次元における現象もしくは関係
- \$5 現象と単位
- \$6 二つの言語学
- \$7 通時的法則、共時的法則
- \$8 通時的領域と共時的領域
- \$9 共時的領域の区分
- \$10 類推
- \$11 暫定的結論
- \$12 通時的領域の区分

一般言語学への序説としての、インドヨーロッパ言語学概観

前置き (SMIII 95, 96, C (コンスタンタン) のノート、一―一九ページ)

I 言語研究の変遷

II 講義の区分

第一部 諸言語 (SMIII 97-110, C のノート、一九二二―二六ページ)

I 言語形態の多様性

II 地理的多様性を交錯させるさまざまな事実

III 原因という視点から見た地理的多様性

IV 文字法による言語の表記 付・音声学

V 世界の最重要語族の地理・歴史学的一覧

VI ヨーロッパ瞥見

第二部 ラング (SMIII 111-155, C のノート、二六三―四〇七ページ)

I ランゲージから分離されたラング

§1 ラングの定義

§2 パロールの回路

§3 ラング、パロールの区別

§4 パロールの定義

§5 記号学におけるラングの位置

II 言語記号の性質

§1 二重性

§2 恣意性と線状性

III ラングを構成する具体的本質体

§1 聴覚映像と概念の不分離性

§2 言連鎖における単位の主観的固定

IV ラングの抽象的本質体

V 絶対的恣意性と相対的恣意性

§1 動機づけの有無による二つの恣意性

§2 ラング、パロールの区別再考

II 補遺(1) 題の訂正、記号の体系としてのラング

II 補遺(2) シーニュの不易性と可易性

§1 恣意性と必然性

§2 時間のファクター…連続性

§3 時間のファクター…変化

II 補遺(3) 静態言語学と史的言語学…言語学の二重性

§1 区分の必然性

§2 静態と動態

VI 静態言語学

§1 前置きとしての注意

§2 体系の辞項としての語…連辞・連合関係

§3 辞項の価値と、語の意義

§4 価値の恣意性と表現の恣意性

§5 差異と対立

(5)

SM96(III)
「講義の大まかな区分

第一部 諸言語

第二部 ラング

SM96(III)
「個人におけるランゲージ能力とその行使。」

SM96(III)
「個人には分節言語能力と呼ぶことができる一つの能力がある。(…)しかし、これはあくまで能力に過ぎず、外から与えられるもう一つのもの、すなわちラングなしにこれを行使することは事実上不可能であろう。(…)ランゲージは抽象的なものであり、それが現前するためには人間存在を前提とする。このようにランゲージ能力とラングを区別することによって、我々は、ラングに(産物)の名を与え、ランゲージは、常にラングによって現前すると言えらるであろう。」

SM96(III)
「人間はたとえ歌う能力をもつが、社会が指導しなければ、曲を作ることにはできないだろう。」

SM96(III)
「言語学者は、最初は諸言語の多様性を研究する以外にすべはない。彼はまず、諸言語を、それも可能な限りの言語を研究し、出来る限り自らの地平を拡張せねばならない。(…)こうした諸言語の研究と観察を通して、言語学者はそこから原理的な特徴を抽出し、本質的かつ普遍的と思われるすべてを残して、偶然による個別的事象をわきよけておくことができるようになるだろう。そうして彼の前に残るものは、抽象の総体であり、これがラングと呼ばれるものである。ラングの中に、我々はさまざまな言語において観察される事象を要約している。」

SM96(III)
「言語は音のイメージと、心的対立の上に成り立つ体系である。綴りに替えてみよう。重要なことは、一連の視覚印象なのであり、色調の組み合わせが織物の意味を形成するのであって、糸がどのように染められたかというようなことではない。」

SM96(III)
「言語をチェスゲームに譬えてみよう。対立させられた価値の働きが可能でさえあれば、駒を作っている材質(象牙とか木とか)を知ることにはほとんど意味をもたない。従って、(音声生理学)Lauphysologieは言語学に属していないのである。」

SM96(III)
「ラングII受動的なもので集団の中に存在する。これはランゲージを組織化し、言語能力の行使に必要な道具を構成する社会的なコードである。」

SM96(III)
「ランゲージを実現するための一般的な諸能力の使用(発声作用など)。(1)ランゲージに基づいた、ラングというコードの個人的行使。」

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

SM96(III)
「第一のものはパロールの生理的そして物理的側面を表しているのに対し、第二のものとは同じ行為の心理的・精神的側面を代表している。また、最初の変化は無意識下に起こるのに対し、第二の変化は意識的である。もちろん、意識の概念がとりわけ相対的なものであることを常に忘れてはならないが。(手稿1, 断章番号三二八四)

(6)

「次の事象は個人、あるいはパロールに属する。

(a) 発声作用のすべて

(b) 結合のすべて——意志に基づくすべて

二重性

パロールⅡ個人的意志

ラングⅡ社会的受動性

ここにおいて、はじめて二つの言語学の問題が登場する。〔手稿22、断章番号三三三二〕

「コトバは、そのいかなる表示においても一つの素材この語は一度書かれて抹消されている、実質を呈することはなく、ただそこにあるものは、生理的・物理的・精神的な力によって結合されたり引き離されたりする活動だけである。〔手稿9、断章番号三二九五〕

「直接的であるにせよ間接的であるにせよ、ラングに入るものはすべてパロールによるのであり(……)、その反対に、個人にそのパロールを構成するための要素を提供してくれる、ラングなる産物があつてはじめて、パロールが可能となるのだ。」

「結論は次のようになる。二つの対象、ラングとパロールが、お互いを前提とし、その存在は他の存在なしにあり得ないことも真実なら、それとは反対に、両者の特質があまりにも似通っていないので、それぞれ別の理論を必要とするということも事実である。この二つを一緒にしたものと言語学の名を冠すべきか、それともラングの研究だけに言語学の名をとっておくべきか？ 我々は、ラングの言語学とパロールの言語学を二つ別々に考えることができるのである。こうは言っても、ラングの言語学をあつかう時、パロールの言語学に少しでも立入ってはならないなどと結論してはいけない。そうすることは有用であろう。」

「すでに見たように、言語記号は二つのまことに異なった事象の間に精神が樹立する結合であるが、それらの事象は二つとも心的なものであり主体の中に存在する。一つの聴覚映像が一つの概念に結合されているのである。聴覚映像は物質音ではない。これは音の心的な刻印である。〔かりにこの部分を物質的ということがあつても、これは(感覚的) sensorielle、つまり諸感覚によって供されるという意味であつて、(物理的) physique という意味ではない。〕

「概念と(音の)イメージの結合である全体をシーニュと呼ぼうとしているのか、聴覚映像自体がシーニュと呼ばれ得るのかを知る必要がある。いかなる場合にも arbeits(働)がシーニュと呼ばれるのは、それが概念を担っている限りにおいてしか絶対的にあり得ないのだ。そこに解決すべき用語上のポイントがある。二つの異なる用語が必要であろう。我々は混同を避けるように努力しなければならぬ。というのは、その混同は重大な結果を生じかねないのだから。」

「用語を変更した理由は次のようなものである。一つの記号の体系を内部から考察する時には、シニフィアンとシニフィエを指定する、もしくは対置することの意味がある。こうすることによって二つのものが対置させられるからであり、イメージと概念という対立を傍にのけておくことになるからである。」

(7)

「第一原理もしくは基本的真理。言語記号は恣意的である。与えられた聴覚映像と特定の概念を結び結は、そしてこれに記号の価値を付与する結は、根柢的に恣意的な結である。記号は恣意的である。つまり、たとえば sound(姉妹)という概念は、いかなる性格、いかなる内的関係によつても、これに対応する聴覚映像を形成する一連の sounds という音とは結はれていない。」

「シニフィアン(言語の場合は)聴覚的なものである(とシニフィエ(概念的なものである)は)シーニュを構成する二つの要素である。したがって、次のように言うことになる。〔1〕言語において、シニフィアンをシニフィエに結びつける結は根柢的に恣意的である。」

「記号学は、恣意的記号を対象とすべきなのか、それ以外の記号をもとりあつかうべきなのかを自らに問うことになる。記号学の領域は、むしろ恣意的記号の諸体系の領域なのであって、言語がその主要な例となるであろう。」

「シーニュは、個人の自由選択に任されているという意味で恣意的のではない。それは概念との関係において恣意的なのであり、それをこの概念に特に結びつけるものは、自らのうちに一切もっていないという意味である。社会全体も、シーニュを変えることはできないだろう。というのは、過去の継承が、シーニュに進化事実を押しつけているからである。」

「第二原理もしくは第二の基本的真理。言語記号(シーニュに役立つイメージ)は一つの拡がりをもつていて、この拡がりには唯一つの次元において展開される。この原理を適用することによって多くの事実が明るみに出される。それは一目瞭然である。我々が文の中の単語を切り取ることができると、この原理の結果である。このことは、シーニュが聴覚的であることに由来する(シーニュは、線状の次元、唯一つの次元しかもたない時間において展開される)。多次元に亘って錯綜し得るシーニュ、たとえば視覚的記号と異なり、聴覚的記号は一つの線上に形作られる空間の中で錯綜を呈し得るのみである。シーニュのすべての要素は相次いで継起し、一つの連鎖を作らざるを得ない。」

「言語においては、シニフィアンが聴覚的性質をもっているため、時間の中でのみ展開し、時間から借用した次の性格を有する。つまり、(a) 一方の拡がりを表すこと、(b) 唯一つの次元においてしか形作られない拡がりを表すこと、である。先には、単にシーニュという語を用いたので不明瞭さを残していた(ため、今回訂正しておく)。」

(8)

「本質体(essence)」。これは辞書の定義によると、存在を構成する本質(essence)のことである。科学の領域のなかには、研究者の目の前に有機体があつてそれを存在と見做す領域もいくつもある。しかし他方には言語の領域のような領域もあつて、そこでははじめからさまざまな存在が目前に提供されているということができない。用語を選ばなければならぬ。本質体とは、我々にとつてもやはり現れている存在である。しかし仲介者の助けを借りずに言語に直面すると、言語のなかには単位も本質体も与えられてはいないのである。言語内に含まれている多様な本質体を捉えるためには、また、言語とは別の次元に属する本質体を言語のそれと取り違えないためには、努力が必要となる。我々が直面するのは、有機体でも物体でもないのだ。真の本質体を見るためには、言語をあつかう我々の置かれた立場がまことに不利である。というのは、言語の現象は内面的であり、その土台からして複雑なものだからである。言語現象は、概念と聴覚映像という二つのものの結合を前提としている。だからこそ言語を形成している「さまざまな事象の」堆積のなからその本質体を選び分けてとり出すためには、積極的な操作と細心の注意が必要となると言えるのである。」

「我々が言語の本質体を目前にする第一の条件とは、二つの要素の間の結合が現前し、存続することである。それとは気づかずに両者の一方だけを、一方の部分だけを捉えたとしたら、すでに言語の単位を偽造したことになる。その場合には、一つの抽象を行なったのであり、もはや我々の目前にあるものは具体的対象ではなくなっているのだ。言語記号内で結びつけられているものを分離してはならない。身体と心から作られている人間を比喻に出すことは、部分的に正しい。言語の本質を、化学合成物、たとえば水に譬えることもできよう。水は水素と酸素から成っているH₂Oである。おそらく、化学においては、それらの元素を分離して、酸素と水素を別々にとり出しても、化学の次元にとどまっている。その反対に、もし言語の水を水素と酸素に分けてしまったら、もはや言語学の次元にはいないことになる。すでに言語的本質体は存在しないのだから。」

「我々が本質体とは何かということを認識するのに苦労したのと同じように、同一性とは何かという認識も容易ではない。我々は次のような同一性を認めることがよくある。毎日五時二十五分にコルナヴァン駅(ジュネーヴの駅名)から出発する列車は、我々にとって同じ列車である。」

一人の演説者が戦争について語り、十五回も二十回も戦争という語をくり返す場合も、我々はそれが同じ語だと言う。ところが、発音される度に異なった行為がなされているのである。これがまず第一の視点である。次に、もう一つの視点を考察してみよう。同じ文の中で私はたとえば *Son violon a le même son* (彼のヴァイオリンは同じ音を出す)。「最初の son は「彼の」という意味をもち、最後の son は「音」という意味をもつ」と言う場合があり得る。先の例では「くり返された」音の同一性に専ら目を向けていたが、今度の例では二回くり返された聴覚切片である son を同一と見ないことになるのである。(……)この種の同一性は、主観的な定義不能の要素を含んでいる。どこに同一性を見るかという視点は、常に微妙で固定し難い。」

「言語のメカニズムのすべては、同一性と差異の周囲をめぐっている。ここでは、単位とは何かという問題提起と、同一性とは何かという問題提起とは、同じことであるという点だけを注意しておこう。」

「一般的なすべての記号の体系と同様に、ラングの特徴とは、一つの事物を弁別するものと、それを構成するものが同じであるところにある。」(手稿19、断章番号三三二八・三)

「言語事象にとつては、《要素》と《性質》は永遠に同一物である。すべての記号学的体系と同様に、一つの事物を区別するものと、その事物を構成するもの間に違いが認められないというのが、ラングの特性である。(何故なら、ここで言う《事物》とは記号であつて、これら記号の役割、本質は、他の記号と別物であること以外にないからだ。)(手稿24a、断章番号三三四二・二)

「すべての記号は、純粹に、否定的な相互位置関係(cotatus negativus)に拠っている。」(手稿12、断章番号三二九九・一八)

「この分野(神話)においても言語学に関連する分野と同様に、非存在物であるところの語とか神話上の人物とかアルファベットの文字を問題にする時の同一性とは何かということ、つまり同一性の性格に關しての考察が不十分であるために、すべての誤まった考案が生ずる。これらの語や神話上の人物や文字は、哲学的意味で《記号》のさまざまな形に過ぎないのだから。」(ニーベルングのノート、Ms. fr. 9358)

「恣意的という語に代えて、無動機、と言うことができる。シーニュとその音性との間の絆が相対的に動機づけられていることもある。たとえば、vingt(二十)と dix-neuf(十九)を考えてみよう。vingt というシーニュが絶対的に無動機であるのに比べて、dix-neufの方は完全に無動機というわけではなく、ある見当がつく。なるほど、vingt は言語内に共存するいかなる辞項の助けも借りていないが、dix-neufの方は言語内に共存する dix(十)と neuf(九)という辞項の助けを借りて構成されている。つまり、この語は動機づけられようとしているのである。dix の中にあるものも neuf の中にあるものもいずれも全く恣意的である。ところが dix-neuf になると、相対的な動機づけの中に身を置いているのだ。」

「それが表している観念との関係においては、いかなるシニフィアンも恣意的であり、自由に選ばれたかの如くであり、他のシニフィアンに代えられるかのように思われる(cable(ケーブル)は sable(砂)と表現されてもいいし、その逆でもいい)。それをを用いるべく運命づけられている人間社会との関連においては、シーニュはいささかも自由なものではなく、課せられたものである。(……)

この自由のもつ非自由性という矛盾を含むように見える事実は、くだけた言い方をすれば、トランプ奇術師が巧みに仕組んだ「相手に抜かせるカード」のようなものとも言える。(……)

個人がフランス語のある単語とかある法を変えようと望んでも、それは不可能であろうし、大衆といえどもそうすることは出来まい。大衆は、あるがままのラングに縛りつけられているのである。」

「何故そのようなかという原因について、第一の考察は次のようなものである。ラングをいつの時代において捉えようと、いかに古く時代をさかのぼって捉えても、ラングとはいかなる瞬間にもそれに先行する瞬間から相続する遺産なのである。いかなる社会も、先行する諸世代がある程度完成させた産物として以外のラングをもったためしはないし、それをあるがままに受け入れざるを得ない。」

「要約すると次のようになる。ラングを構成しているシーニュの非自由性はその歴史的側面に起因している、あるいは、ラングにおける時間というファクターの顕現である。何となれば、このシーニュの非自由性が生ずる根拠は、ラング内の時間というファクターがもたらす連続性であり、世代から世代へと引継がれるシーニュの連続性だからである。時間、というファクターのもう一つの現れ方は、一見、第一のものと矛盾している。それは何世代かを経る時に生ずるシーニュの変化という形で現れるのである。この章の題が、同時にシーニュの不易性と可易性(可変性)について語っているのはそういう理由からなのだ。」

「(連続性と変化)」、この二つは密接に結びついている。両者が、究極的には同一の原因をもっていることは明らかである。シーニュは何故、変化する状況におかれているのか？ それはシーニュが時代から時代へと継承されるからなのだ。もしシーニュが継承されず、十年毎にすべてが新しいシーニュから成る新たなラングを人びとが制定するとしたら、シーニュの不易性などという観念は意味のないものになってしまうことだろう。」

「変化の原理は連続性の原理に基づいている。出発点に再び立戻って考えると、上のような図式が得られるであろう。」

「いかなるラングも、それがすべてのラングがもつ条件を実現している場合には、変化の諸要因に抗するすべはない。その結果、時とともに、シニフィエに対するシニフィアンのトータルな関係がずらされるのである。」

「シーニュの諸体系(書記体系もその一つである。パブラヴィ語(中期イラン語)の代表的言語参照)においては、聖賢者の手話にいたるまで、(時の)盲目的な力が関係をずらしてしまう。時間における連続性と変化を切り離すことが出来ないという事は、一般記号学の事実であろう。」

「我々は、時間の軸を加えることによって、次の図式とともに完全な現実に到達する。(語る大衆 *masse parlante* の情性化)は時間によって増幅され、時間の中で考察されることになるのである。」

「経済学は、いくつかの社会的価値の間の均衡を研究する。すなわち、労働の価値と資本の価値がそれである。しかしこの分野においては前に挙げたすべての科学とは違って、経済学史(時間の中の経済学)と経済学という二つの異なった講座がある。」

「三番目の段階として価値体系(恣意的価値)——記号学のように恣意的に決定し得る価値——に至ると、この二つの軸を区別する必要性は最高度に達する。(……)少なくともその一面においてこの価値がその足場を、その根を事物の中においての限り、——たとえばなる地所が五万フランとする場合——この価値を時間の推移の中で、その変動とともに追うことは、まだ比較的容易である。(……)しかし、これは何らかの触知可能な基盤を保っているものであり、そこには、物質性が残るであろう。これに反して、記号を構成する結びつきにおいては、二つの価値(シニフィエ、シニフィアンの差異から生ずるもの)以外の何ものもない。これが記号の恣意的原理である。」

「すべての価値は隣接する価値もしくは対立する価値に依存する。そしてまた、ある変化、一つの関係のずれが起きるのも自明の理であるとしたら、いくつかの時代を混合して一列に並んだ諸辞項を前に、どのような判断を下したらよいのであるうか。価値もしくは同時代性、これは同義語である。」

「言語事実がその間に起きるこれら二つの領域が無定形であるばかりか、二つを結ぶ絆の選択、価値を生み出す二つの領域の合体は、完全に恣意的である。もし恣意的でなかったら、この価値に対する考え方は制限され、何か絶対的要素があることになってしまうであろう。またもし恣意的でなかったら、諸価値は、程度の差こそあれ、絶対的なものとなってしまおうであろう。しかし、この契約が完全に恣意的であるのだから、価値は完全に相対的なものとなる。」

「この図は、おそらく存在理由をもっているであろうが、これが価値の二次的産物に過ぎないこともわかる。シニフィエのみでは何物でもなく、それは形のない塊の中に溶解してしまうだろう。シニフィアンの方も同じことなのだ。」

「シニフィアンとシニフィエの絆は、人が混沌たる塊に働きかけて切り取ることに出来るかかかくの聴覚記号とかかかくの觀念の切片の結合から生じた特定の価値のおかげで、結ばれる。この関係が即自的に与えられていたと言えらるためには、何が必要であろうか。まず何よりも、觀念があらかじめ決定されている必要があるだろう。しかし実際には決定されてはいない。まず何よりもシニフィエがあらかじめ決定されている事物であった必要がある。しかし実際にはそうではないのである。」

「↑という図式はしたがって言語においては一次的なものではない。Signの価値は二つの面から決定される。觀念自体の輪郭、これこそ一言語が我々に与えてくれるところの、諸觀念の語への配分なのである。この輪郭が与えられてはじめて、↑という図式は考察の対象となり得るだろう。」

「ある語がその周囲に持っているものは、言語学者によって、ある時は連辞領域において、またある時は連合領域において議論されるであろう。その語の周囲に連辞的に在るものというものは、その前後に来るものであり、そのコンテクストである。それに対して、その語の周囲に連合的に存在するものはいかなるコンテクストにも置かれず、意識から生ずる(意識の絆によって結合される)ものであって、空間(時間)の観念はない。(……)その結合は一方は『顕在的』in praesentia、他方は『潜在的』in absentiaであると云えよう。」

「価値という語をめぐって我々が述べたことは、次の原理を措定することによっても言い換えることができる。すなわち、言語の中には(つまり一言語状態の中には)差異しかない。差異という、我々は差異がその間に樹立される実定的な辞項を想起しがちである。しかし、言語の中には実定的な辞項をもたない差異しかない、という逆説である。そこにこそ、逆説的真理があるのだ。」

「厳密に言うと、シーニュが在るのではなくて、シーニュ間の差異があるだけである。チェコ語の例をひこう。妻という意味のzenaの複数属格はzenyである。この言語の中にあつて、zena, zenの存在価値は、以前に存在していたzenaとその複数属格zenyと全く同様である。どちらがより優れている対立とも言えない。(……)シーニュ間の差異だけが働いている。zenaの価値は、それがzenaと異なることから生じ、zenの価値もそれがzenaと異なることから生ずる。」

「そこには差異しかない。実定的(+)な辞項は一切存在しない。(……)シニフィアンの働きは差異に基づいている。同様に、シニフィエを考えてみても、そこには聴覚的次元の差異によって条件づけられるであろう差異しかない。」

「こうして我々は、観念の差異に結びつけられた音の差異としてのラングの全体系に直面することが出来る。与えられた実定的(+)な観念は一つもなく、また観念の外にあつて決定される聴覚記号は一つもない。しかし、相互に条件づけあう差異のおかげで、つまり、かくかくの(聴覚)記号の差異(一)と、かくかくの観念の差異(二)が結ばれたために、我々は何か実定的(+)な実体(+)に似たものを相手にすることになる。この結合の実定的(+)な要素があるためにそこにはもはや差異しかないとは言えず、我々是对立について語る事ができるだろう。」

「最後に到達する原理は、シーニュの恣意性という基本原理である。シーニュに一つの機能、一つの価値を与えることができるのは、シーニュ間の差異だけである。もしシーニュが恣意的でなかったら、ラングの中に差異しかないとは言えないであろう。」

「次のようなものは存在しない。
(a) 他の諸観念に対して、あらかじめ出来上っていて、まったく別物であるような観念。
(b) このような観念に対応する記号。」

「そうではなくて、言語記号が登場する以前の思考には、何一つとして明瞭に識別されるものはない。これが重要な点である。」

「つぎの一八二五番からは意識でなしに物質界のほうの(メニング)、未分節の連続体に言及します。」

「この浮動的な王国と向かい合つて、音のほうこそはそれだけであらかじめ限りとられた実在体を呈しはしまいか？ おなじことである。音的実体とても、より固定したもので、より堅固なものでもない。それは思想がぜひともその形をとらねばならない鑄型ではなくて、一つの造形資料であり、これまた分明な部分に分かれて、思想の必要とする能記を供するのである。(小林訳) 原資料のコンスタンタンを見てください。」

「一方、この全く混沌とした領域に對面する音の領域が、あらかじめ明瞭に識別できる観念や単位を提供しているかどうか問うてみることも無意味なことではあるまい。音の領域においてもまた、あらかじめ区切られた、はっきりと識別できる単位は存在しないのである。」

「一連の音が、それ自体において一つの鑄型であるというのは偽りである。これもまた、それ自体においては思考と同じように混沌たる物質なのだ。」

「ランガージュが思考に対してもつ特有の役割というものは、その音的、または物質的手段となることではなく、思考と音の仲介的場を創ることであつて、その結果(未分節の)思考と音は否応なしに個別の単位を形成する。もともとカオス的性格をもつ思考は、それがランガージュによって単位へと分解され、配分されるが故に、明確なものとならざるを得ないわけである。次のようなことははっきりと否定せねばならない。つまり、有用な音素である音によって、思考が物質化されるなど考へてはならない。これは、思考「音なる存在が生み出す分割こそ言語学の究極的単位であるという、一種、神秘的な事象なのである。音と思考は、これらの単位によってしか結びつくことはできない。二つの無定形な塊の譬えとして、水と空気を考へてみよう。気圧が変れば、水の表面は一連の単位へと分解される。これが波である。これは空気と水の中間に介在する連鎖であつて実質を形成しはしない。この波動が二つの結合を表し、言ってみれば、思考と、それ自体は無定形な音の連鎖との合体を表している。二つの組み合わせが、一つの形相を生み出すのである。」

「物質的な音に對置し得るものうちに、観念があるということは、根柢から否定せねばならない。物質音に對置可能なものは、(音)観念であつて、絶対に(観念)ではない。」

「この対応関係は、以下のような譬えによって表すことができよう。一枚の紙の裏にはさみを入れずに表を切ることはできないのだ。(4)この思考に対するシーニュ

の関係こそシーニュ自体なのであって、シーニュというものは一連の音節などではなく、それらの音節が一定の意味を担うかぎりにおいて構成される二重の存在である。シーニュは二重である。図示すれば(5)となり、ここに記号学の最も困難な点がある。この側面は、先に指摘した、問題へのアプローチの仕方そのものによって見逃されてしまっていた。両者の一方の項は、抽象によってしか取り出せない。これらの分節、これらの単位の外でなされるものは、純粋心理学(思考)か、あるいは音声学(音)となってしまう。この二項の結合はひとつの形相を生み出すのである。」

「我々は、社会的産物という特色をもっている現象のみを、記号学の対象と認める。(……)換言すれば、ラングは記号学的産物であり、記号学的産物は社会的産物である、ということである。しかし、その正体は何であろうか。いかなる記号学的体系もさまざまな次元に属する複雑な単位群から構成されているが、これらの単位の真の性質は——これこそ記号学的単位を他の事物と区別するものであるが——価値であるということなのだ。シーニュ(記号)の体系という単位の体系は、価値体系にはかならず、経済学をも含めて、あらゆる次元の価値はシーニュ(記号)である。(……)価値を対象にするや否や、その関係性が問題となる。いかなる価値といえども個的存在ではあり得ず、記号は集団(体系)の容認によってしか即自的な価値をもつには至らなからう。記号の中には、一見、二種の価値(即自的な価値と集団(体系)から生れる価値)があるように思われるが、実はいずれも同じものなのである。(……)いかなる次元にせよ、集団(体系)によらない価値体系など存在しない。」

個人は個人としてはどのような価値を制定することもできない。(……)先に描いた(6)という図をもう一度取上げてみよう。この図はおそらく存在理由をもっているであろうが、これが価値の二次的産物に過ぎないこともわかる。シニフィエのみでは何物でもなく、それは形のない塊の中に溶解してしまいうだろう。シニフィエの方と同じことなのだ。

シニフィエとシニフィエの絆は、人がカオスの塊に働きかけて切り取ることで出来るかくかくの聴覚記号とかくかくの觀念の切片の結合から生じた特定の価値のおかげで、結ばれる。この関係が即自的に与えられていたと考えるためには、何が必要であろうか。まず何よりも、觀念があらかじめ決定されている必要があるだろう。しかし実際には決定されてはいない。まず何よりもシニフィエがあらかじめ決定されている事物であった必要がある。しかし実際にはそうではないのである。

だからこそ、関係というのは、互いの対立のうちに、つまりその体系内で捉えられた価値というのと同じことなのである。(……)我々には一つの語が単独に存在し得るといふ幻想があるが、ある語の価値は、いかなる瞬間においても、他の同じような単位との関係によってしか生じない。語や辞項から出発して体系を抽出してはならない。そうすることは、諸辞項が前以て絶対的価値を持ち、体系を得るためには、それらをただ祖立てさえすればよいという考えに立つことになってしまいうだろう。その反対に、出発すべきは体系からであり、互いに固く結ばれた全体からであ